時評

佐藤洋一郎 総合地球環境学研究所副所長・教授

震災とプロ意識

「想定外」は許されない

東日本大震災からはや1カ月。行方不明者の数すら正確につかめないほどのこの大災害は、第2次大戦以来の大きなできごとだという。原発事故がそれに輪をかけている。地震直後の緊急避難から復興に向けたとりくみできりと光ったのが幾多のプロの行動である。

的確な判断で何人もの人命を救った消防士。大混乱のなかを持てる技能と一糸乱れぬ規律で活動した自衛隊員。ボランティアの医師。そして暴れ狂う原発で働く現場の作業員。多くは語らないが、時には生命を賭し黙々と仕事をこなす彼らの働きには頭が下がる。さすがはプロ。そう賞賛したい。

ところがこうしたプロたちへの評価は不当に低い。マスコミも、彼らの働きを一とおり賞賛はするものの、取り上げ方はあまりに表面的だ。仕事だと言ってしまえばそれまでだが、彼らはプロとしての誇りを持って献身的に働いているのだ。その働きがなければ、もっと多くの生命が奪われ、被害はもっと拡大するに相違ないのである。

もうひとつ残念なことがある。現場で働く人びとの多くが自らの仕事に誇りを持って身体を張ってたたかっているというのに、電力会社のトップ、防災工学や原子力発電の専門家にはプロとしての誇りや責任感が感じられない。同じプロなのに、この違いは何だろうか。津波が防潮堤を越えたのは「想定外の規模の津波だったから」といってみたり、原発の事故もその想定外の津波によるといわんばかりだ。

「想定外」という語を、被災者が自らの被災を自らに納得させるのに使うのならばわかる。だが専門家の場合は違う。専門家がこの語を発した瞬間、災害は不可抗力になり、責任はうやむやになり、そこから学ぶべきものは何もなくなる。私は、それは許されないことだと思うのだ。

防潮堤を作った時、想定を超える大津波が街を襲うとは考えなかったのか。原発を作った時、地震と津波で制御不能になる事態を想定しなかったのか。そうだとすればあまりに不勉強で社会に対する誠意がない。それはプロとしての意識や誇りの欠如以外の何ものでもない。

今回の津波被害や原発事故は、日本ばかりか世界のあちこちで、科学技術に対する風当たりを強くした。専門家の誠意のない態度が大きな原因の一つだと思う。私はいつもいうのだが、科学技術はそれを支えた社会の財産であり、人びとはその恩恵を等しく受ける権利をもつ。

科学技術はその専門家のためのものではない。現代のように科学技術が社会に支えられる時代にあってはなおさらである。しかし一部の専門家には、このあたりまえの道理が通用しない。社会が科学技術の恩恵をちゃんと受けるには「シビル・コントロール」が必要である。今回の震災が与えた教訓のひとつは、このことではないかとあらためて私は思う。

執筆者略歴

◇さとう・よういちろう氏　京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」（角川書店）「コシヒカリより美味い米」（朝日新書）など。